

実践報告

テレビ番組を活用した英語授業の展開（第1報） —料理番組をリスニング素材として使用した授業実践をもとに—

Activities in English Lesson using TV Programs (Part 1)

竹 中 麻美子

Mamiko TAKENAKA

概 要

英語圏で放送されたテレビ番組を英語の授業で取り上げる際の展開について実践報告する。学生の専門分野に関する番組やシーンを選んで使用することで、学生の興味・関心を惹き、学習に積極的になることがわかった。また、理解した内容についての学生の意見や感想を教員の体験も交えながら引き出すことで、外国語を学ぶ面白さを知り、異文化に触れる経験をすることができる。

効果的に演出、編集され、視聴者向けの強いメッセージ性を持つテレビ番組を授業で取り上げることは、学生の異文化コミュニケーションへの興味を深め、外国語学習の意欲を高めるのに役立つといえる。

1. はじめに

英語という科目には多くの学生が苦手意識を抱いている。子どもの頃には興味や関心を抱いていても、中学、高校と学んでいく中で苦手意識はますます強くなり、大学に入ってまで英語を学びたくはない、と考える学生が多い。

しかし、大学での英語教育は、「学生は一般的共通な英語力のほかに、専門的職業に備えてのさまざまな英語力をつけるための最後の学校教育」（小池 1993）である。学生が選んだ専門分野に関わりのある内容の英語に触れることは学生の将来にとって有益であると考えられる。

筆者は、担当する英語の授業の中で、学生が選んだ専門分野に関連のある様々な素材を教材として積極的に取り入れている。学生にとって興味のある、魅力的な内容であるからこそ、より内容を理解したいという学習に対する強い動機を与えて

くれると考える。

この報告では、視聴覚教材としてのテレビ番組の有益性とそれを使った授業展開の工夫について述べる。リスニング指導の手順は田島（1993）の「ヒアリングの指導」を参考にした。

2. 方法

Y短期大学食物栄養科1年生が受講した英語の授業を研究対象とする。視聴覚教材として、英語圏で制作、放送され、日本でも吹き替えて放送された番組を取り上げた。

一般に市販されている英語リスニング教材ではなく、イギリスで実際に放送された番組を視聴することは学生にとって非常にハードルが高いが、それでも「話されていることが全くわからない」ではなく「ここまで聞き取ることができた」と感じることは大きな自信につながる。通常話されている英語がどのようなものなのか、少しでも触れ

て、実際の会話を疑似体験する機会を設けたいと考えた。

英語初心者を対象とした聞きやすいリスニング音声ではなく、ネイティブに向けた会話であるから時に聴取不能な音声もあるが、聞き手に届けるべきメッセージを含んでいることが、実際に放送されたテレビ番組を英語教材として使用した大きな理由である。

また、質の高い番組を多く輩出するイギリスのテレビが持つ高いメッセージ性にも注目した。今回授業で取り上げた番組のテーマは、健康面に配慮し、料理を手作りすることの大切さ、楽しさである。まずは番組内で話されている英語、交わされている会話の内容を理解し、さらに番組視聴者として学生がどのようなメッセージを受け取るのか、それを受けて自身がどのように考えるか、そこまでをフォローすることが英語のコミュニケーション能力を高めるためにも重要であると考えた。

今回使用した番組は、本国イギリスではBBC2、日本ではNHK教育にて放送された教養番組、「ミス・ホアンのお手軽チャイニーズ」(原題: Chinese Food Made Easy)である。この番組は、台湾生まれ、イギリス育ちの若手シェフ、ミス・ホアン・チンヒーがイギリスで人気の中華料理を自宅で簡単に作ることでできるレシピを紹介し、様々なシチュエーションで多くの人に試食をしてもらうという形で進行する。

イギリスではインド料理と並んで中華料理が人気である。中華料理の高級レストランに行き豪華なコースを味わうこともあれば、持ち帰り(イギリス英語ではtakeawayという)専門の店で定番メニューを手軽に楽しむ若者も多い。イギリスではかなり身近な外食の定番といえる。しかし手料理となると話は別で、独特な調味料や料理法の数々に、家で作るのは無理、と考える人が多い。そのような人々に、この番組は大いに人気を博した。

授業で使用したのは、このシリーズの第1回放送、「人気のテイクアウトメニュー」(Takeaway Favourites)である。ミス・ホアンが、人気の持ち帰りメニューである卵チャーハンと酢豚を女子ボート競技のオリンピックナショナルチームのメンバー、キャサリン・グレンジャーと共に作る、という内容である。

授業では、この番組から以下の2場面の英語表現を取り上げた。

場面① 番組冒頭のミス・ホアン本人によるナレーション部分。彼女のプロフィールと番組紹介が短く簡潔に述べられている。

場面② ミス・ホアンとキャサリンが実際に調理を始める前の導入部分。持ち帰りの中華料理に含まれる砂糖、塩、油脂をミス・ホアンがキャサリンに示し、その不健康さについて語っている。

(1) 授業を行うまでの準備作業

学生はまず、NHK教育にて放送された際の日本語吹き替え版で番組のダイジェストを視聴する。これは可能な限り前の週の授業の後半に行い、学生にはこの中から一部を来週の教材として使用することのみ伝える。番組の大まかなイメージをつかむことが目的である。

また、そこにいたるまでの授業の中で、いくつか聞き取りのヒントとなる単語をまったく別のコンテキストにおいて学習する。一度覚えて忘れてしまっている学生も、今回のヒアリングを行う中で同じ単語に再度出会うことでその言葉の意味を自分のものにすることができると考えた。

(2) 実際の授業の手順

- 1) 今回リスニング教材として取り上げるシーンで話されている英語を文章化した資料を配布し、続いてそのシーンをオリジナル英語音声で収録したものを視聴する。学生にとっては、先週視聴した記憶も新しい映像である。
- 2) 続いて音声のみを取り出したものを、間に15秒ほどはさみながら何回か繰り返し聞く。
- 3) 一旦10分程度のブレイクを入れる。この間に辞書で単語を調べたり、周囲のクラスメイトと聞き取った単語(またはその一部)の教え合いなどをする。
- 4) 再度英語音声の聞き取りを何回か繰り返しながら行う。
- 5) 聞き取った英文の内容を、番組の雰囲気に合わせた言葉を使いながら訳していく。
- 6) 声に出して読む。
- 7) 再度音声を聴く。
- 8) これを場面①、場面②と繰り返す。
- 9) それぞれの英文を理解した後、内容について

て振りかえる。教員自身の経験や、学生がこれまで学んだ食物栄養に関する知識なども用いながら、今回視聴した内容についてのそれぞれの感想や意見を述べる。

がら、今回視聴した内容についてのそれぞれの感想や意見を述べる。

3. 結果と考察

(1) 場面①で使用した英語表現

表1 番組冒頭のミス・ホアン本人によるナレーション

My name is Ching-He Huang. I've been cooking for my family and friends since I was five years old, helping my grandmother in her family home. It was a start of a lifelong affair with food, a passion that became my career in writing cookery books and running a food business. (略)
In this program, I will show you some insider tips that help you cook fresh, healthy versions of some of the most popular Chinese takeaway dishes in your own kitchen.

(訳)

私の名前はホアン・チンヒー。5歳の頃からお婆ちゃん家で手伝いながら、家族や友人のために料理を作ってきました。それがきっかけで私と料理との素敵な関係が始まり、料理への情熱は私の仕事となって、料理の本を書いたりフードビジネスを手掛けたりしています。

この番組では、人気のテイクアウトの定番を自宅で新鮮で健康的に調理する秘訣をご紹介します。

下線部が穴あきで、語群から単語を選ぶ形式で行った。

まずほとんどの学生が、「英語が速すぎて何を言っているのかさっぱりわからない」と口々に言う。流れてくるのは、英語学習者向けゆっくりとしたスピードで話されていない英語である。ネイティブに向けたものなので、当然である。しかし、繰り返し聞いているうちに、単語の一部の音声をキャッチすることができるようになってくる。教員は音声の繰り返し流れている間、適宜学生の間を巡回する。話すスピードが速く、ひとつひとつの単語を語群からゆっくり選ぶことができないので、聞き取った単語の一部をアルファベットやカタカナでメモし、次の音声の流れれてくるまでの15秒程度の時間に語群から選ぶ、という流れで作業を進める学生が多い。語群があるので、音の似ている単語を探していけば正解にたどり着くのはそれほど難しいことではない。穴あき部分は名詞を中心に、比較的聞き取りやすいものを選んだ。途中のブレイクによってクラスメイトと教え合っ

たりすることでさらに作業を進めることができる。

ひとつとおり穴埋めが終わったところで内容を訳していく。です・まず調で英文を訳すことに慣れている学生だが、ここではテレビ番組にふさわしくカジュアルでおしゃれな表現を適宜使いながら訳していく。

全体のイメージがつかめ、意味がだいたい理解できたところで全員で声に出して読んでいく。最後にもう一度音声を聴く。多くの学生が最初に聞いた時よりスピードがゆっくりと感じる、という。

このリスニングエクササイズは場面②へ続くウォーミング・アップの役割も果たしている。学生はまず番組の主人公、ミス・ホアンの簡単なプロフィールを知る。これを参考に、教員は学生に聞き取った内容をより身近に感じてもらうため、料理を始めた年齢や料理に興味を持ったきっかけを聞いてみたりする。

(2) 場面②で使用した英語表現

表2 持ち帰り中華料理の調味料の多さについての会話

Ching : Did you know that the average serving for a family of four of sweet and sour pork and egg fried rice containsTa-dah!

Catharine : No way!

Ching : This amount of fat - 240gms, 36gms of salt and 136gms of sugar. 240gms of fat - that is as much fat (as) in 30 hamburgers. (筆者補足)

Catharine : 30 hamburgers? No way!!

Ching : Would you like some?

Catharine : No, no thanks.

Ching : Now, I'm gonna show you a healthier version, which is fantastic, much better than that.

Catharine : It sounds a lot healthier.

(訳)

ミス・チン：知ってた？ 平均的な家族4人分の酢豚と卵チャーハンにはね、これだけ入っているの。

ジャジャーン！

キャサリン：え、嘘！

ミス・チン：油脂はこれだけあるの、240g。塩は36g、砂糖は136g。240gの油脂、これってね、ハンバーガー30個分に相当するのよ。

キャサリン：ハンバーガー30個分？嘘でしょう!!

ミス・チン：どう、召し上がる？

キャサリン：とんでもない、結構よ。

ミス・チン：さあ、じゃあこれからこんなのよりもっと健康的でおいしいのを作るわね。

キャサリン：きっとはるかに健康的ね。

下線部が穴あきで、語群はなし。

この時も教員は音声が続いている間、教室を巡回する。今回は語群がないので苦労している様子である。空欄の多くは名詞であり、事前に視聴した際の映像が大きなヒントになっている。

話された言語、音声言語と文字言語の違いは、その情報量の多さと「非言語的情報（音声の質や話すことに伴う表情、身振りなど）」の有無である（田島 1993）。授業においてリスニングにチャレンジする場合、ただ音声のみを聞き取る練習をするより、視覚的情報が伴われていた方が内容理解に役立つ。テレビ番組においては、演者の表情や番組に登場する小道具のクローズアップが効果的に編集されており、リスニング教材としても理想的といえる。

この番組では、映像として、持ち帰り中華料理の定番である酢豚と卵チャーハン4人分に平均的

に含まれる砂糖、塩、油脂を具体的に示すため、それぞれプレートに乗せ、視覚的にも明確に示している。食物栄養について専門的に学んでいる学生にとっては非常にわかりやすい場面である。学生はこれらの視覚的情報を穴あきの単語を探す際のヒントや内容理解の参考にすることができる。また、このプレートを示す際に、劇的な演出を狙い、ミス・ホアンの"Ta-dah!"という掛け声とともに覆いが外され、プレート上の塩や砂糖、油脂が映されている。このときのいたずらっぽい表情をしたミス・ホアンと驚いて口がふさがらない、といった体のキャサリンの表情の対比も素晴らしい。"Ta-dah!"という擬音は多くの学生には初めて聞く表現であるが、この映像を見ればそれが日本語で「ジャジャーン」に該当することはすぐに想像できる。

単語の一部をキャッチすることができた学生の間に、辞書で調べようとする学生が出てくる。聞き取った単語が正しいのか、確認しようとしていると思われる。そこで一旦音声を止める。ここまですでに7回～9回程度音声が繰り返されている。

ここで、落ち着いて辞書で調べる、あるいは周囲のクラスメイトと答え合わせをする、教え合う、などの作業を行う。教員は適宜学生のグループに聞き取りのヒントを与えることもあるが、目的はそれによって学生同士を会話させ、その中から正解を引き出すというプロセスである。可能な限り学生同士の学び合いの機会を設けることがこのブレイク時間の目的である。

波線部は過去の授業において学んだ表現が再度登場している部分である。

酢豚 (sweet and sour pork) と卵チャーハン (egg fried rice) は、以前に学んだ中華料理の英語名称である。その際にもひとつひとつ単語を切って読むのではなく、一つの単語のように一気に読む練習もしている。そこに気づくことができれば、空欄の数と聞き取った単語の数が合わない、ということとはなくなる。教師が与えるヒントは、その部分に入るのは、「ある料理の名前である」、「以前授業で出てきた」、などである。過去のプリントを参考にする、という指導をする場合もある。

ブレイクを経てさらに5回程度音声を聴くと多くの学生が空欄を8割程度埋めることができる。

ここで答え合わせをしつつ、さらにカジュアルな表現で訳していく。会話文なので、です、ます調はふさわしくないことが学生にも理解できている。また、訳も一つだけではないことを学ぶことができる。キャサリンが "No way" という表現を2回使っているが、この表現も「嘘でしょう」「まさか」「ありえない」など様々なパターンで訳していくことができる。これはそのまま二人の会話に疑似参加している学生の素直な感想ということもできる。

教員が、持ち帰り中華料理4人分に含まれる塩分を1人分に換算して、どう思うかを学生に聞くと、皆「ありえない」「取りすぎ」など、素直な感想を述べてくれる。食物栄養科で専門的知識を学んだからこそ持つことができる考えである。番

組で得た情報を理解した上で食物学を学ぶ学生としての意見を持つ、という一種のコミュニケーションが成立しているのである。

最後に、この視聴覚教材と学生を結ぶ役割を果たすエピソードとして、教員自身の実体験を少し語る。

筆者自身も学生時代をイギリスで過ごした際、何度もち帰りの中華料理の世話になった。その時の実際の経験を学生に話すことで、より授業で学んだ内容が学生にとって身近に感じられるのではないかと考える。イギリスでは、日本のようにおいしい食事に出会えることは少ない。学生時代の筆者にとってTakeawayの中華料理は御馳走であった。友人と競い合うようにチャーハンや五目そば、酢豚を食べたあと、決まってひどい喉の渇きを感じた。食に無頓着であったから気づかなかったが、使用されていた醤油や砂糖、油脂は相当の量であったはずである。またある時、中華料理屋で酢豚を注文したところ、私を東洋人と見た若い店員が好意で甘酢あんをさらにお玉一杯追加してご飯にかけてくれた。しかしそれはとてもあんとは呼べないピンク色の甘いシロップで、白いご飯がたっぷりピンク色の液体に浸かり、さすがに辟易した。これらの実体験を学生は非常に興味を持って聞いてくれる。

授業の中でいかに持ち帰りの中華料理が不健康であるかを知り、さらにそれらを実際に口にした教員の話聞くことで、学生の学びは一気に身近なものとなる。

4. まとめ

興味を持って英語の授業を受ける、ということは学生にとってなかなか難しいが、取り上げられている教材を工夫することで少しでも学生の興味、関心を惹くことは可能である。

学生の専門分野に関係のある内容を取り上げ、内容を知りたい、理解したい、と学生自身が感じることは学習意欲の向上において効果が高いといえる。

また、英語が苦手である、という学生に自信を持たせることも重要である。最初に聞いた時には全く理解できなかったネイティブに向けた表現が、授業を受けたことで理解することができれば、大

きな自信につながるであろう。そのためにも、学生が知りたい、と感じるような教材を準備することが重要であると考え。また、それをととして異文化体験をすることも外国語の授業の大きな役割のひとつである。海外の料理番組の視聴をととして、自国の食文化を見直すきっかけにもなる。

ロバート・ヒルキ (2014) は、異文化コミュニケーションにおいてはたがいの「常識」の違いを認識し、客観的に見る力を養うことの大切さを述べている。

海外のテレビ番組を教材として用いることは、学生が、自身が興味のある分野での異文化体験をし、番組が送るメッセージの受け手のひとりとなることで、大学で学んだ専門分野の内容を再認識する機会を持つことができる。そして、将来訪れるであろう海外の方とのコミュニケーションにおいて、その経験は必ず役に立ってくれるはずである。

参考資料・文献

NHK教育 2010 ミス・ホアンのお手軽チャイニーズ 2月11日 (木) 11:30~11:55

小池生夫 1993 第8章 ヒアリングの指導 8.3.2
大学におけるヒアリング能力の到達目標 小池生夫編
英語のヒアリングとその指導 大修館書店 249-252

田島 穆 1993 第8章 ヒアリングの指導 8.1.1
言語の本質, 8.4.5ヒアリングの力を養うための種々のアプローチ 小池生夫編 英語のヒアリングとその指導 大修館書店 233-243, 265-273

Huang, Ching-He (2008) "Chinese Food Made Easy" Harper Collins Publishers

Monteath, Gareth, Robert Hilke, and Link Global Solution (2014) "Navigating Through Cultural Diversity" Kenkyusha

Thompson, Della (ed.) (1993) "Oxford Dictionary of Current English" Oxford University Press